



KANSAI
UNIVERSITY

CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning

Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

December 2017

vol. 25

主体的な学びのために

教育開発支援センター長 関口 理久子



毎年新入生の導入教育である専門科目のクラスを担当し、学生に課す課題がある。テーマは、私の研究テーマでもある「記憶」から選ぶことが多い。まずは様々な記憶の検査・測定・実験方法を学生たちに体験してもらおうのだが、課題の真の目的は、自分自身を知ることであり、心理学という学問領域で、ところを測ることの難しさや楽しさを発見してほしいということである。しかし、このような授業で毎年のように学生たちが必ず私に対して発する問いがあり、それは、「自分の記憶力は悪いのではないか」ということである。記憶力が悪いと試験の成績も悪くなるし、結果として自分は頭が悪いと思われるのではという心配がどうも彼らの問いの根底にあると感じる。

DRMパラダイム (Deese-Roediger-McDermott paradigm) という記憶検査方法がある。これは、虚偽記憶を生じさせると言われてきた方法であり、この手続きでは、特定の単語 (ルアー語、例えば「希望」) を連想させる単語リスト (リスト語として、例え

ば「将来」、「夢」、「ふくらむ」など) を提示した後に、提示された単語を報告させる。その時、リストで提示されていなかったルアー語 (例では、「希望」) を誤って「思い出した」と報告すると、虚偽記憶が生じたということになる。学生たちにこの課題を行うと、自分が正しく単語を思い出さず、虚偽の単語を思い出した、すなわち、誤りを犯したことに気付くことになる。そこで、先述したように、「記憶力が悪いのか!」という心配が生じるのである。

しかし、これは果たして記憶力が悪いことになるのだろうか。虚偽記憶を報告した人は、記憶力が悪いのではなく、言語的な概念形成の能力が高く、抽象的に思考できる人なのではないか、そして、そもそも虚偽記憶を生じさせるパラダイムとされてきたものは何を測っているのか、という疑問が私も含め記憶研究者の中では最近言われだしているのである。

大学入学までの学校の授業は、多くが「憶える」を軸に展開している。当然大学で

も基礎的・専門的知識を憶えることは重要である。しかし、学生たちは単に憶えるだけでは満足できず、知識をまとめ体系化し、そこに意味を見出そうとする。さらに理解を深め新しい学び方を展開しよう、得られた知識を実践しようという者もいる。教員の側も、主体的な学びとは、「憶える」を超えたところにあるのはわかっている、ではどのようにすればそれが達成できるのか、試行錯誤し戸惑うことも多い。

上述したパラダイムに疑問が投げかけられたように、大学教育もまた常に見直され、新たな展開がその都度丁寧に試みられなければならない。教育開発支援センター (CTL) では、4人の専任教員が中心となり、17人の研究員とともに、教育環境、教育支援、FDなどに関する複数のプロジェクトが行われている。CTLの使命は、どのような新たな方法が可能なのかを学生、職員、教員に提示していく、そして、自ら率先してそれらの方法に取り組むということであると考えている。